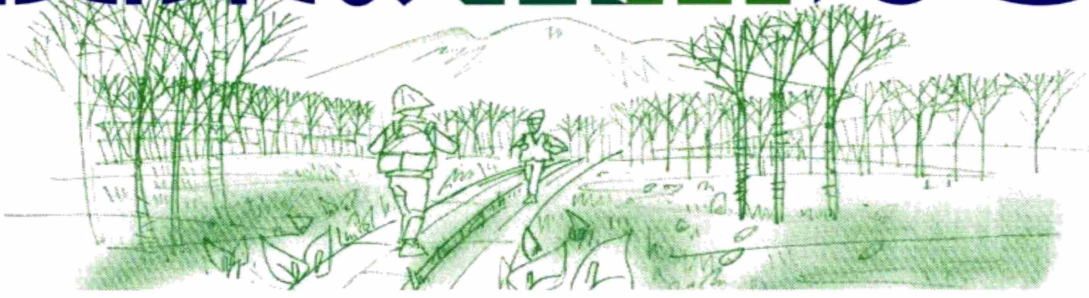


令和4年1月1日

第211号

関東の森林から



国民の森林・国有林

関東森林管理局

前橋市岩神町4-16-25
TEL.027-210-1158
<http://www.rinya.maff.go.jp/kanto/>

謹賀新年

新年のご挨拶 赤崎 暢彦 局長・・・2

小笠原の島から～ネズミ駆除！～ 小笠原諸島森林生態系保全センター・・・4

高尾の森から 高尾森林ふれあいセンター・・・5

森づくり最前線

会津森林管理署南会津支署小林森林事務所 首席森林官 栗城武実・・・6

【写真】十二ヶ岳から見た富士山（山梨森林管理事務所）

新年のご挨拶

関東森林管理局長 赤崎 暢彦



令和4年の新春を迎え、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

皆様方には、日頃より関東森林管理局の業務運営はもとより、林野行政全般にわたり、ご理解とご協力をいただいております、厚く御礼を申し上げます。

昨年は、世界中が新型コロナウイルス感染症の波に翻弄される一年となりました。森林・林業・木材産業の分野では、世界的な木材不足により国産材も含めて価格が高騰する「ウッドショック」と呼ばれる現象が起きました。木材不足でいつ家が建つかわからないなどという状況は、戦後の木材不足の時代が終わって以来長らく見られなかったことです。この事態に対して関東森林管理局では、各地域の需給動向を注視しながら木材供給を前倒しで実施するなど、できる限りの対応をしてまいりました。木材の安定供給に対する需要者の関心が非常に高い中、国有林の供給調整機能が一定の効果を上げることができたのではないかと考えております。

木材は再生可能な資源であり、建築物等に使うことで炭素を蓄え、燃料に使うことで化石燃料を代替できることから、木材利用がSDGsやカーボンニュートラルに貢献するとして注目を集めています。ウッドショックがあったものの、木材利用の意義が損なわれることはなく、むしろ輸入材よりも身近な森林の木材を活用することが大切であると教えてくれたと思います。我が国の森林資源は本格的な利用期を迎えており、「伐って、使って、植える」という循環を回して持続的に利用していくことが可能になっています。林業に従事する方の育成や、伐出作業の生産性向上を含めて、長い目で見てしっかりと木材供給能力を高めていく必要があります。今後とも計画的な事業発注や技術開発・普及を通じて、林業事業体の育成、生産性の向上に貢献してまいります。

一方、林業に追い風が吹いているとはいえ、乗り越えるべき課題はまだあります。伐った後に植えて育てる造林作業の低コスト化・省力化は、森林所有者の再造林意欲を高めるために極めて重要な課題となっています。また、ICTを活用した森林情報利用の高度化、捕獲や防護によるシカ被害対策も大きな課題です。これら林業界共通の課題に対して、先導的に新技術の開発・検証・普及に取り組んでまいります。

コロナ禍を通じたもう一つの変化として、都市部の家にこもるよりは自然の中で過ごす方が良く考える方が増え、キャンプなどアウトドアへの関心が高まりました。このことは森林や山村の価値が改めて見直される契機になったと思います。国有林には美しい景観や貴重な自然があり、一部は「レクリエーションの森」等として国民の皆様が森林に親しみやすい環境を整備しています。原生的な森林生態系や希少な野生生物が生育・生息する森林についてはこれからも適切に保護しつつ、開かれた「国民の森林」として国民の皆様により豊かな生活環境を提供するお手伝いをしていきたいと考えております。

また、台風や豪雨などの自然災害が年々激甚化しており、適切な森林整備や治山対策など、国土強靱化への取組の重要性が高まっています。主に河川の上流域に位置する国有林は特に国土保全の責務があり、今後とも事前防災、減災対策、被災地の早期復旧に取り組んでまいります。東日本大震災から復興途上の福島県においては、県内林業の再生に引き続き着実に取り組んでまいります。

国有林は、国民共通の財産です。国民の皆様のご意見・ご要望をよく聴かせていただき、期待に応えられるようしっかりと仕事を進めていきたいと考えております。

関東森林管理局の広報誌「関東の森林から」では、関東森林管理局の取組をよりわかりやすく皆様にお伝えしてまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

結びに、新しい年が皆様にとって健康で幸多い年となりますよう祈念申し上げまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。



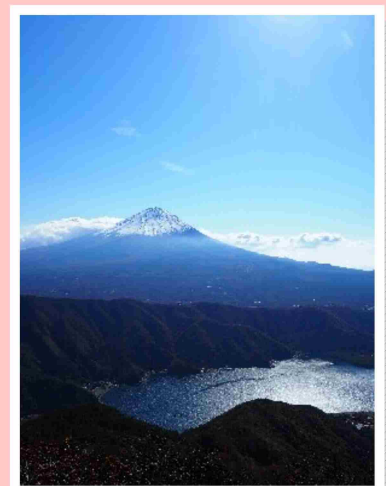
今月の表紙

十二ヶ岳から見た富士山（山梨森林管理事務所）

富士五湖周辺には富士山の眺めが素晴らしい山々が数多くあります。

その一つである十二ヶ岳は、富士山の外輪山として形成された西湖の北側に位置する山です。東にある毛無山から延びる登山道は狭い尾根が連続し、山名由来のとおり12の峰を数えます。

この登山道はクサリ場等もあるなど、低山ながら登山技術が必要とされますが、苦勞して登った山頂から足和田山越の雄大な富士山の絶景が広がり、眼下に西湖を望むことができます。



小笠原の島から ～ネズミ駆除!～

小笠原諸島森林生態系保全センター



小笠原諸島は島が誕生してから一度も大陸と陸続きになったことがないため、かなりの数の種が小笠原で固有に進化してきました。固有種の宝庫で、現在も進化の途上ということも非常に貴重だとして、世界遺産に登録されています。一方、過去から現在までの人間活動によって、外来種が小笠原の至る所に侵入・生息生育しており、固有種の宝庫という事実を疑ってしまうこともあります。この小笠原固有の生態系を保護・回復させるため、日々、様々な人々が外来種の駆除や固有種の育成などを行っています。

今回紹介するのは、弟島でのオガサワラグワ（以下、「オガグワ」という。）の保護活動です。弟島は父島列島の一つで、現在は人が住んでいませんが、過去には牧場や学校、酒屋などがあり、人間活動による生態系の破壊を経験している島です。オガグワは、その名の通り小笠原の固有種で、樹齢数百年を超える老齢個体の材は黒く変色し、かつて高級材として活発に取引されました。伐採が進み、現存するオガグワは極めて少なくなっています。また、人が持ち込んだシマグワ（本州のヤマグワ）と交雑することも相まって、自然に増加することはほぼ期待できない状態です。今回の保護活動地は、オガグワの天然交配が行われている小笠原諸島で唯一の箇所です。

例年、同地でのオガグワ実生の発生は数個体程度が確認されていましたが、昨年と今年で100個体以上の実生が確認されました。これは一昨年の台風による林内ギャップの形成が理由と考えられていますが、オガグワ保護にあたっては僥倖ともいえるべき状況です。しかし、人間とともに入ってきたクマネズミがオガグワの実生を食べるため、実生の保護が必要でした。

保護方法は、実生を直接保護するネズミ防除ネットの設置と、間接保護となるネズミ駆除（今回は毒エサの設置）となります。現地は土質が悪くネット設置ができない場所が多いため、ネット設置を行った上、ネズミ

駆除を追加で行いました。

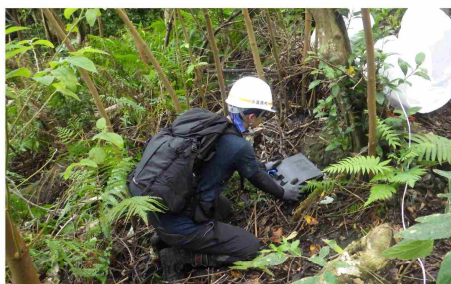
ネット設置は東京都が主導で7月に行われ、ネズミ駆除は当センターが主導で11月16日に行いました。これらの取組は東京都と小笠原村、当センターが協働して行っており、情報交換や保全対策を効率的に実施しています。オガグワ保護にとってチャンスと捉え、今後もオガグワの動態を把握しつつ必要な措置を行っていき、オガグワ保護の道筋をつけたいと思います。



▲ オガサワラグワの自生地



▲ オガサワラグワの稚樹



▲ ベイトステーション（ネズミ駆除の罠）の設置



▲ 毒エサを食べるネズミ（ベイトステーション内）

高尾の森から

高尾森林ふれあいセンター

11月13日（土）に公募イベント「つるかご編み」を開催しました。これは当センターの公募イベントの中で最も人気の高いイベントです。林業では、植えた樹木の生育を妨げる「つる類」を駆除する作業を行います。その駆除したつるを用いています。今回は15名の参加となりました。

開会に当たって、参加者の皆さんに「林業の厄介者」であるつるを駆除する目的で実施していることを毎回お伝えしています。

さて、お待ちかねのかごの編み込みの始まりです。まず、山のように積まれたつるの中から、作りたいかごの形に見合った太さのものを選び出します。

編み方は、熟練した？当センター職員およびボランティアのフォレストサポートスタッフが個別に対応していきます。中には相当熟練した参加者もいて、逆に教をを請う場合もありました。午前中は10時から12時までの2時間作業をしましたが、あっという間に昼食タイムに……。しかし、皆さん食事もそこそこに切り上げ作業を再開し、つるかご編みに寄せる情熱がうかがえました。

楽しい時間はあっという間に過ぎて、終了時刻の14時。でき上がった作品を棚に並べて皆さんで鑑賞しました。自然の素材を利用しているので、でき上がりは大小様々です。それが良い風合いの素敵な作品となりました。



▲ 自分好みのつる選び



▲ 黙々と編み込み



▲ でき上がった作品を鑑賞



▲ 力作揃い

イグチ科の 毒きのこ

わからないきのこは採らない、食べない、人にあげないを徹底してきのこ中毒に注意してください



アシベニイグチ（毒）（イグチ科イグチ属）

7月下旬から10月下旬、オオシラビソなどの深山の針葉樹林内の地上に単生から散生する。

カサは、6cmから12cmでオリーブ褐色でピロード状をしている。

管孔は黄色で、変色性が極めて強く、触ったり傷付けたりすると一瞬で青変し、柄に湾生する。

柄は、5cmから10cmで表面は赤色、頂部は黄色で表面に白色の網目模様があり、傷付くと青変する。

肉は、白色から淡黄色で苦みがあり、傷付くと青変する。



ニセアシベニイグチ（毒）（イグチ科イグチ属）

7月上旬から9月中旬に広葉樹林内の地上に散生から群生する。

カサは4cmから15cm位で、表面の色は変化に富み赤褐色又は黄褐色から暗褐色。粘性はなく平滑である。

管孔は柄に垂生し、初め淡黄色で後に汚褐色になり、傷付けば青変する。

柄は3cm～5cmで黄色の地に灰褐色のかすり模様があり、基部は白色である。

肉は黄白色で、傷付くと青変し速やかに退色して淡灰色になる。

森づくり最前線

会津森林管理署南会津支署
小林森林事務所 首席森林官 栗城武実

『八十里 こしめけ武士の 越す峠』
八十里越（はちじゅうりごえ）は、幕末から戊辰戦争にかけて越後長岡藩の家老であった河合継之助が長岡から会津藩を目指した峠です。無念にも道半ばで42歳の生涯を終えた継之助終焉の地として知られる福島県只見町にあり、小林森林事務所も当町にあります。

只見町は、福島県西端の新潟県境に位置し、浅草岳や会津朝日岳など標高1,000m級の山々に囲まれた山間地で、県内でも有数の豪雪地帯です。昨年は、森林事務所周辺で約2m、只見駅周辺では3m以上の積雪がありました。この豪雪により周囲の山々は独特な地形を呈しており、緑の山肌にまるで彫刻刀で削られたように、むき出しの岩盤が現れた迫力のある景色に圧倒されます。これは雪崩により山肌が削られる「雪食地形」といわれる豪雪地帯ならではのものです、標高の低い森林帯にあるのは日本だけという世界的に見ても珍しい光景です。

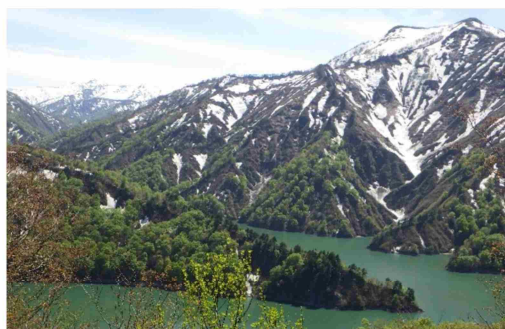
また、その地形にあった植物群落がパッチ状に分布する「モザイク植生」となっています。ブナ林をはじめ森林が町の面積の約94%を占め、希少猛禽類やツキノワグマなどの多様な野生動植物が数多く生息・生育しています。このような豊かな生態系や生物多様性の保全と人々との共生を目的として、平成26年にユネスコが認定するエコパークに只見町が登録されました。

当事務所の管轄面積は約5万haと広大です。施業が必要となる人工林は約1千haあり、スギ・カラマツの40年生以上の林分が大半を占めていますが、林道から離れた奥地林が多いことから、効率的な施業が課題となっています。

また、管内の国有林では、約10年前からカシノナガキクイムシによるナラ枯れ被害が発生していることから、只見町と共同でクイムシを誘引する丸太を設置し捕獲する対策を実施しています。これを今後も継続し、被害防止に努めていきたいと考えています。



▲ 冬の小林森林事務所



▲ 「雪食地形」と「モザイク植生」



▲ 新緑



▲ 紅葉

「国有林と田子倉ダム」



▲ ナラ枯れ被害地